

S8

日本手話のモーダルから手話言語の普遍的特徴を探る

マーガレット・ルース・クラブトリー、セルピル・カラビュクリュ、
ロニー・B・ウィルバー
(パデュー大学 [アメリカ])

要旨

Bross & Hole (2017) (以下「BH」と略す) は、音声言語について普遍的であると Cinque & Rizzi (2008) が見出したモダリティ順序が、手話言語にも通用するのではないかと考えた。BH は、SOV 語順の手話言語であるドイツ手話を調査し、モーダルの作用域が広いほど、調音器官の位置が、手から口、頬、さらに眉と高くなっていくと主張した。さらに、中程度の作用域を持つモーダルは左から右へ作用域を伸ばすのに対し、狭い作用域のモーダルは右から左へ作用域を伸ばすという。

この仮説は、同じく SOV 語順の手話言語であるトルコ手話を題材にして既に検証が始まっている (Karabüklü & Wilbur 2018)。その研究では、右から左へのモーダル連鎖のみが支持され、左から右へのモーダル連鎖の証拠は見られなかった。また、BH の仮説に従えば別々のモーダルであるはずのものが同一の調音器官 (たとえば目など) で発せられた場合、どのような結論を導けばいいのか明確でない。

本発表では、日本手話のろう者話者5名の協力を得て、この仮説の検証を目的とする予備的実験の結果を報告する。日本手話も SOV 型の言語であり、モーダルはすべて文末に現れなければならない。Ichida (2010) は、発話行為を示す演算子が多く顔に現れると述べている。Matsuoka (2016) によると、文末に現れるモーダルの順序には制約があるという。我々は、これらの研究で提案されている体系が BH のものに適合するか否か、またこれらの体系に対して BH が新たな予測や説明をもたらすか否かを検証する。

参考文献

- Bross, F. & D. Hole. 2017. Scope-taking Strategies and the Order of Clausal Categories in German Sign Language. *Glossa: A Journal of General Linguistics* 2(1).
- Cinque, G. & L. Rizzi. 2008. The Cartography of Syntactic Structures. *Studies in Linguistics* 2: 42–58.
- Ichida, Y. 2010. Introduction to Japanese Sign Language: Iconicity in Language. In M. Hirakawa, S. Inagaki, S. Arita, Y. Goto K. Butler, E. Horie, Hauser, Y. Shirai, & J. Tsubakita (eds.). *Studies in Language Sciences 9: Papers from the Ninth Annual*

- Conference of the Japanese Society for Language Sciences*, pp. 3-34. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Karabüklü, S. & R. B. Wilbur. 2018. *Scope Taking in Turkish Sign Language (TİD)*. PLLS. Lafayette, Indiana.
- Matsuoka, Kazumi, Uiko Yano, Hitomi Akahori, & Norie Oka. 2016. Notes on Modals and Negation in Japanese Sign Language (Studies in Language Sciences). *Journal of the Japanese Society for Language Sciences* 15: 1-20.